

天声人語

きょうで没後100年となる夏目漱石は、相当な温泉好きだったとお見受けする。『草枕』にある「ふわり、ふわりと魂がくらげの様に浮いて居る。世の中もこんな気になれば楽なものだ」とは湯の中の描写である。読むだけで気持ちがほぐれる▼「とかくに人の世は住みにくい」と独白した主人公は、たどりついた温泉宿で湯に身をゆだねた。分別の錠前を開け、魂まで流す。欧化が進み変化の激しい明治の世で文豪は温泉に癒やされたのか▼温泉が出てくる作品は他にもあり『二百十日』では阿蘇の湯で男が一人、とりとめのない話をして楽しそうだ。華族や金持ちに悪態をついたかと思うと、翌日の昼にうどんを食べるかどうか議論が始まる▼漱石は目にしただろうか。一説には江戸時代まさかのぼるという「逃」の温泉マークである。「外国人に温かい食べ物を連想させる」との心配から、入浴する人の姿を加えた国際基準に統一する案が経済産業省から出された▼東京五輪に向けた提案だったが、「逃」の発祥の地をうたう群馬県の磯部温泉などから反発され、二つとも使える方向になつた。温泉の風情は各地で異なる。マークもあえて統一しなくてよからう▼漱石は『二百十日』で湯上がりをこう描く。「ひやりと吹く秋風が、袖口からすうと這入つて、素肌を臍のあたりまで吹き抜けた」。浴衣を羽織り、そんな気分を楽しむ外国人がいまは日本各地にいるだろう。カジノよりも健康的な観光資源であるのは間違いない。

2016・12・9